

Title	下部尿路不定愁訴に対する清心蓮子飲治療
Author(s)	石橋, 晃; 三木, 信男
Citation	泌尿器科紀要 (1984), 30(2): 275-277
Issue Date	1984-02
URL	http://hdl.handle.net/2433/118107
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

下部尿路不定愁訴に対する清心蓮子飲治療

北里大学医学部泌尿器科学教室（主任：小柴 健教授）

石 橋 晃
三 木 信 男SEISHIN-RENSHI-IN THERAPY FOR PATIENTS
WITH DISCOMFORTS ON THE LOWER URINARY TRACT

Akira ISHIBASHI and Nobuo MIKI

From the Department of Urology, School of Medicine, Kitasato University

(Director: Prof. K. Koshiba)

The clinical effect of Seishin-renshi-in was studied in 18 patients with prolonged discomfort in the lower urinary tract. Seishin-renshi-in was administered orally at doses of 7.5 g, for courses ranging from 2 weeks to more than 10 weeks. Except in 4 cases in which administration was stopped because of slight side effects on the gastrointestinal tract; the overall effective ratio was 81%. Our findings suggest that Seishin-renshi-in may be useful in the control of discomforts in the lower urinary tract.

Key words: Seishin-Renshi-In, Discomforts in the lower urinary tract

は じ め に

最近、漢方薬は副作用が少なく安全に投与できることと、健康保険で扱える薬剤になったため、西洋（近代）医学の領域でも多く使用されるようになった。今回は津村順天堂の好意により、清心蓮子飲を主に下部尿路性器疾患でいわゆる不定愁訴を有する症例に試みる機会があり、若干の成績を得たので報告する。

対 象

北里大学泌尿器科外来患者のうち、上記のような不定愁訴を示す症例18例を対象とした。男性、女性とも各9例で、年齢は27～78歳（平均49.3±14.7）である。疾患名はTable 1のように、慢性前立腺炎、慢性膀胱炎、神経因性膀胱など多くにおよぶ。これらは、一般検尿、尿培養、前立腺液培養などでいずれも陰性、病的所見がなく、そのわりに下腹部、会陰部あるいは尿道部に頑固な不快感の持続する、いわゆる不定愁訴を呈する症例である。漢方の各種成書にしたがい、いわゆる虚証でさらに胃腸障害を有するもの、あるいは以前に上部消化器疾患を経験した例をできる限り対象

として選んだが、逆に対照例として、故意に実証と思われるもの2例を加えた。

投 与 方 法

原則として、清心蓮子飲を食前に2.5gずつ1日3回の服用とした。本剤の性質上効果の出現はやや緩徐と思われたため、初回投与後2週間目に効果判定をし、以降は症状の改善度や患者の希望などを勘案して、2週単位で継続投与をおこなった。なお、本剤投与中は他剤との併用はおこなわず、単独投与とした。投与に際し、本剤の有効性を過大に評価するような要因、たとえば患者に「非常にこの薬はよく効く」ということなどの心理的誘導を極力避けるよう配慮した。

成 績

判定の基準として、目的とする症状のすべてが2週間の投与期間内に完全に消失したものを著効とし、2週間でもかなり軽減し、その後の投与で消失したものを有効、軽減はするものの4週間以上の観察期間中に消失しえなかったものをやや有効とした。また、2週後に症状は変らないか、あるいは悪化したものは無効、

Table 1. 清心蓮子飲投与例一覧

No.	氏名	性	年齢	疾患名	主訴	胃腸障害	証	投与期間 (週)	効果	副作用
1	M T	女	45	慢性膀胱炎	残尿感	(±)	虚	10	著効	なし
2	N N	女	34	"	"	(+)	"	12	"	"
3	O H	女	43	"	残尿感, 血尿	(+)	"	6	"	"
4	K T	女	57	膀胱神経症	下腹部不快感	(+)	"	4	"	"
5	H H	男	52	右尿管結石	"	(+)	"	6	"	"
6	O K	女	73	慢性膀胱炎	頻尿	(+)	"	4	有効	"
7	Y T	男	43	後部尿道炎	残尿感	(+)	"	4	"	"
8	A T	男	27	慢性尿道炎	"	(-)	"	10	"	"
9	E Y	男	38	"	"	(±)	不明	4	"	"
10	N M	男	34	慢性前立腺炎	会陰部不快感	(+)	"	12	やや有効	"
11	O T	男	68	慢性尿道炎	排尿時不快感	(+)	虚	2	"	胃部不快感
12	S S	女	63	急性膀胱炎	下腹部痛	不明	"	2	無効	なし
13	K Y	女	43	両側腎下垂	下腹部不快感	(±)	"	2	"	"
14	U T	男	54	慢性前立腺炎	"	(-)	実	2	"	"
15	A M	男	61	"	"	(-)	"	2	"	"
16	O T	男	68	慢性尿道炎	排尿時不快感	(+)	虚	2 (中止)	判定不能	胃部不快感
17	K M	女	78	神経因性膀胱	尿失禁, 下腹部不快感	(+)	"	1 (中止)	"	"
18	S M	女	38	"	"	(+)	"	(2)	来院せず	不明

副作用のため投与中止したものは判定不能とした。

成績の一覧は Table 1 に示す。著効例は全部で5例ありいずれも虚証で、胃腸障害を有していた。No. 4 の57歳女性の例は、投与後3日で完全に下腹部不快感が消失、本人の希望で4週間投与し中止したが、以後症状の再発をみなかった。

有効は4例あり、いずれも慢性膀胱炎あるいは尿道炎と診断された例で虚証が3例、他の1例は明確な記載のない例であった。No. 8 27歳男性の例は抗うつ剤や精神安定剤をすでに処方されていたが、いずれも無効であり、本剤投与後2週目で症状はかなり軽減し4～6週目にほぼ消失した。しかし、10週目にごく軽度の頻尿が残っていた。

やや有効は2例あり、1例は虚証、1例は証についての記載はなかった。

無効例は4例で対照例として実証に投与した2例を除けば2例のみである。しかし、これらの中の1例は急性膀胱炎で細菌感染に対していわゆる化学療法剤が先行されるべき症例であり、他の1例は腎下垂の症例で、内臓下垂にともなう下腹部重圧感が主訴であり、症状の寛解に対してはこれらの原因除去が優先されるべきで、本剤の適応からはややはずれていると思われる症例であった。

その他に脱落例と思われる症例が3例あり、1例は再来院しないため効果判定不能であり、他の2例は胃部不快感の副作用のため効果判定に必要十分な服用ができなかった例である。しかし、No. 17, 78歳女性の

神経因性膀胱の例は、器質的な膀胱機能障害が認められており、投与も十分ではなかったが2週間後の判定でも、まったく症状の改善はみられず、このようなあきらかな器質的障害例も本剤の適応外と思われた。

副作用

18例中8例には、投与前と、2～4週後に採血をおこない、血液一般、GOT, GPT, 血清アルカリフォスファターゼ、血清クレアチニン値、尿素窒素などを調べたが、それぞれの値に関して変動を認めなかった。また、18例中3例に胃部不快感が出現し、1例は軽度のため投与をつづけたが、2例は投与を中止した。この2例とも中止後すぐに胃部不快感は改善した。もともと胃腸障害、胃部不快感のある例に投与することが多いため、いちおう注意すべき点であるが、その程度は軽くさして問題にならないと考える。

考察

一般に漢方薬を投与するにあたって、漢方の治療体系が、西洋医学のそれと異なり、用語もはなはだわかりにくい。いちおう適応症を西洋医学の病名に翻訳して、膀胱炎や尿道炎には、これこれの漢方薬が有効という考え方で投与がおこなわれることが多い。しかし、そのような方式では、まず50%の有効率が得られればよいほうで、ときには20～30%の有効率しか得られぬこともある。

そこで著者は、今回の清心蓮子飲の投与にあたって、

可能な限りで、その中に含有する成分の薬理作用と、古来の漢方としての用法や適応症の理解に務め、その知識をもって投与したところ前述したような好成績を得ることができた。

まず、清心蓮子飲は、麦門冬 4.0 g、茯苓 4.0 g、黄芩 3.0 g、車前子 3.0 g、人参 3.0 g、黄耆 2.0 g、甘草 1.5 g、蓮肉 4.0 g、地骨皮 2.0 g、の割合で混合した製剤である。

麦門冬はユリ科のジャノヒゲなどの肥大根を乾燥して作ることが多く、ステロイド、サポニン配糖体などが主成分で、血糖下降作用、強壯、鎮咳および利尿作用などがあるといわれる。茯苓はサルノコシカケ科のマツホドの菌核を乾燥したもので、多糖類が主成分と考えられ、利尿剤として知られている。黄芩はソコ科のコガネバナなどの根の乾燥品といわれ、baicalin、ステロイドなどを含有し、抗炎症・解熱、利尿効果などがあるといわれる。車前子はオオバコの子より採ったもので、利尿作用と皮膚真菌成長阻止効果があるといわれる。人参は、有名なサポニンを含有し、胃部の不快感、消化不良の改善に有効であるほか、疲労回復、鎮静、強壯効果も有している。黄耆はマメ科のキバナオウギの根を乾燥したもので、フラボノイドなどを有し、降圧効果のほか、腸管収縮、利尿、強壯効果があるといわれる。甘草は、マメ科の植物で、やはり根などを製剤化するが、サポニン類を含有し、鎮痛、コルチコイド、エストロゲン様作用などが知られ胃潰瘍修復促進作用もよく知られている。抗炎症作用も認められるという。蓮肉は、ハスの果実であり、アルカロイドなどを含有し、鎮静、強壯効果、平滑筋弛緩作用などがあるという。地骨皮は、枸杞とも呼ばれ、ナス科のクコの根皮を乾燥したもので、脂肪酸、ステロイド、アミノ酸などを含有し、解熱、強壯効果があるといわれている¹⁻³⁾。また、これらの組合せによる効果としては麦門冬と蓮肉とで循環改善作用が、車前子と地骨皮で腎機能改善効果が茯苓、人参、甘草で消化機能の改善に有効といわれている。したがって、虚証といわれる痩せ型で、やや精力低下型には、上記強壯効果が有効であり、胃腸障害に対する効果も多くの原料で認められ、また、抗炎症、利尿効果が腎尿路系の不定愁訴に有効と理解される。しかし、生薬であるため、上記以外にもさまざまな有効成分とそれともなう複雑な薬理作用を有し、いわゆる計算外の総合的な効果も加味されることは当然である。その反面生薬であるため、

同じ処方でもその都度の製剤で力価の変動は避けられぬようで、同じ製剤でも週により効き方が違うことはよく患者より聞く事実である。しかし、エキス剤と異なり、今回の顆粒製剤は、比較的成分が均一化しているためこの種の弊害は避けられるように思われた。

全体に清心蓮子飲の今回の尿路性器系疾患での不定愁訴に対する効果をみると、成績の項で述べたように、実証の2例と、脱落例3例を除けば、無効例は2例のみであり、この2例も前述したように急性膀胱炎と腎下垂例で、他の西洋医学的治療優先例と考えて、さらにこれを除けばやや有効を含めて有効率は実に100%、含まなくとも11例中9例で81%ということになる。やはり、漢方薬は、漢方の古典に示されたような適応症をよく理解した上で、これを西洋医学的にたくみに翻訳して用いるならば、きわめて高い有効率を得ることが理解された。

副作用は、2～3の例に軽度の胃部不快感がみられたが、投薬中止により容易に回復した。

結 び

1. 当大学外来患者で、主に下部尿路、性器疾患で不定愁訴を呈するもの18例に対し、清心蓮子飲の投与を試みた。

2. 漢方の文献などに従い、主として胃腸障害を有する虚証と思われる症例に投与したところ、脱落例などを除き、80%以上の有効率を得た。なお実証と思われる2例は、いずれも無効であった。

3. 副作用は、3例に服用後胃部不快感を軽度にとめたのみであり、また8例での投与前後の血液一般および血液生化学的検査では異常を認めなかった。

文 献

- 1) 浅野正義・原田正敏・鹿野美弘・木村正康・難波恒雄・大塚恭男・斉藤 洋・柴田 丸・庄司順三・高木敬次郎・脇 正巳・渡辺和夫・渡辺裕司・吉崎正雄：薬用ニンジン（人参）他、和漢薬物学、初版、23～25他、南山堂、東京、1982
- 2) 難波恒雄：麦門冬他、原色和漢薬図鑑上・下、初版、68他、保育社、大阪、1980
- 3) 岡野正憲：猪苓・車前子・竜胆の漢方処方。現代東洋医学 12：43～46、1983

（1983年7月28日受付）